

自由図書の部 次点

福見英健さん 文学部現代社会学科4年

『浮雲』二葉亭四迷著 岩波書店

世の中、100年そこらじゃ変わらない

正直、驚いた。よもや今から約130年前に書かれた小説に共感できるとは思っていなかったからだ。

主人公の内海文三は誠実で勤勉だが、内向的な一面をあわせ持つ青年だ。早くに父を亡くしてからは叔母の家に引き取られ、そこで寝起きをしている。また、同居するいとお勢に好意を抱いており、お勢も彼に気があるようである。そんな「総てが穏やかに、^{やわら}和いで、^{おちつ}沈着いて」いた生活は、文三の免職を契機に一変する。叔母にはさんざん嫌味をいわれ、お勢とは口論のすえ同じ家にいながら半ば絶縁状態となる。こうして社会からも恋愛からも疎外された彼は気を落とし、次第に自分の殻に閉じこもるようになる。

明治維新後、学問をすることがすなわち立身出世に繋がるという風潮があったらしい。文三も一人残された母とともに不自由な暮らしを送るべく、寸陰を惜しんで勉強に励んでいた。その猛烈さたるや、テストでは常に一番を取り続け、教員からも一目置かれるほどであった。しかし、実際に社会に出てみると、学問は彼を守ってはくれなかった。なぜなら真に社会で必要とされていたのは、上に気に入られるように行動する狡猾さやしたたかさだったからだ。だが彼の持ち前の誠実さは、上司にこびへつらったり、ゴマすりをしたりすることを卑劣であるとして唾棄する。しかし、この“可愛くない”態度があだとなって免職させられてしまう。

一方で世渡り上手な文三の元同僚、本田昇は上司の機嫌を取り続けることで昇給を果たす。そしてこれをきっかけに、もともと親交のあった文三の叔母からはこれまで以上に気に入られ、お勢も次第に彼の気質に惹かれていく。つまり、文三が失ったものはすべて昇の手中に収まるのである。

以上のように四迷は、どれだけ学問が出来ても、それが出世や幸福を保証する訳ではない

という当時の世相を鮮やかに描き、批判した。しかしながら、この批判は明治中期だけでなく、今現在に対しても依然として有効なのではないだろうか。私たちは小学校に始まり、およそ12年から16年ものあいだ学校へ通う。人によってはここに学習塾や習い事が付け加わるだろう。しかし、社会に出てから要求されるのは基本的には学力ではなく、長い物には巻かれる精神とそれを許す自分自身の心構えである。要するに、いくら真面目でも、世渡りが上手くなければ実社会では生き辛いという点は昔も今も変わらないのだ。そして、そんな世の中に真っ向から正直にぶつかり、苦悩し続ける文三の姿に同情や共感を覚えるのである。

本書は前述した通り、100年以上前に書かれた。それ故、今では見慣れない単語が多く出てくるが、その度に詳しく注釈がなされているため難しいとは感じなかった。また、四迷は言文一致体を用いるにあたり、落語を参考にしたという。そのためか一文が短く、テンポよく読めて気持ちがいい。日本近代文学に夜明けを告げた傑作、これを機に手に取ってみてはいかがだろうか。